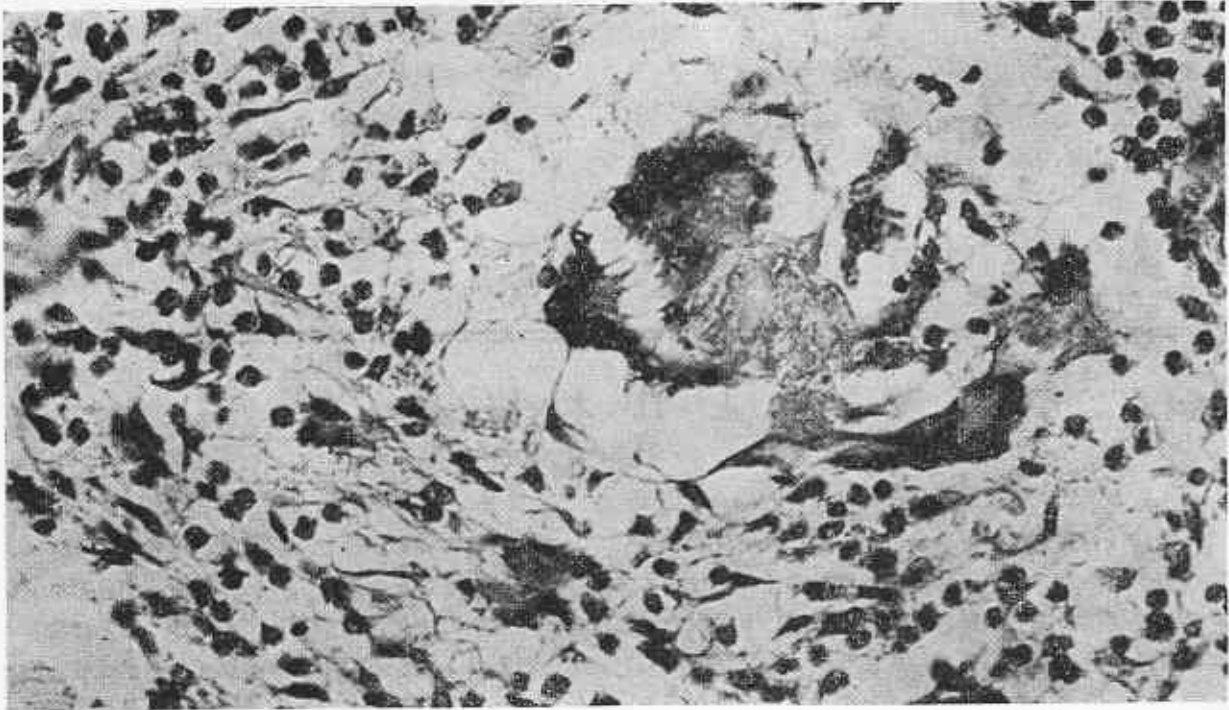


牛 皮 膚 の 肉 芽 性 炎

農林省家畜衛生試験場病理研究室出題・第4回獣医病理学研修会標本No. 56



腫瘍に間違えられるような炎症がある。これもそのひとつ。牛，黒色和種，♂，1960年3月12日生。臨床所見：1963年12月12日左右乳頭部に腫瘤ができた。自潰し血液を混じた漿液をだす。その周辺に鶏卵大位の腫瘤が合計5個認められた。12月19日まで治療したが思わしくないので12月26日に屠場に送った。体温38.2～39.0°C，赤血球560～611万，白血球6,800～8,000。剖検所見：腫瘤のあるのは乳頭部とその周辺で他の部位にはない。腹腔内には大網膜，腸間膜に一致して脂肪組織が腫瘍化しておりこれは組織学的には脂肪壊死であつた。皮膚の病変とは無関係である。その他の臓器には特別の変化はなかつた。組織所見：表層は壊死性，出血水腫。皮膚組織の真皮に一致する部位（毛根が見える）には円形化した結合織細胞が増殖しており縦横に走る粗性な線維がよく見える。血管の新生もある。中口径の血管壁は水腫性に厚くなり弾力線維は著しく疎開している。このような肉芽性組織を舞台として好酸性の胞体をもつ多形核細胞が

ビマン性に浸潤している。数は少ないがエオジンに染まる特殊なかたちを示す異物がある。菌糸に似た構造を示しているものもある。この異物の周辺には円形細胞や巨細胞が集族している。病巣の深部ではこの異物は細片化して巨細胞に取りこまれている（図）。マロリー氏染色をおこなうと結合織線維は青色に染まり部位により密粗がある。異物は濃赤色であつた。

この病変は炎である。したがつて肉芽性炎と称するのは妥当と思う。

さて，異物は目下のところ何という名かはつきりといえないが生き物（微生物）のようである。病変の特徴を正確にとらえておけばいずれ何かの役にたつだろう。次に部位が問題だ。乳首のような柔らかい皮膚や粘膜のようなどころだけが好きなのか身体中どこにでもできるものか。こんなことも例数をつめばだんだんわかつてくるだろう。最後に，肉芽性の炎と腫なるものはまことに複雑である。意義ある課題と思つている。